

安楽寺寺報

# 聞光

第58号  
第58号  
2011/2/15

発行所  
〒737-0054  
呉市上山田町-28  
安楽寺  
TEL0823-21-7561

## 人間について 信楽峻庵

仏教では、人間のことをサットバ  
 といいます。サットバとは、感情を  
 持つものということ、**「有情」**  
 と訳されます。木や石には感情がな  
 いので非情といいます。この有情と  
 は、あらゆる生きものを意味するこ  
 ころ、また**「衆生」**とも訳されま  
 す。その点、仏教では、人間とは動  
 物と同じで何の差違もないと考えま  
 す。ただ仏教で人間が動物だとい  
 うのは、人間とはサルが進化したもの  
 で、もとは尻尾(しっぽ)をもって  
 いたという、そういう形体からいう  
 のではなく、人間はどんな偉い人  
 も、その心の底には、恐ろしい自己  
 中心の心、我欲を宿して、それ  
 は猫や犬とも変わらないということ  
 から、人間は有情、動物だといわ

けです。  
 しかしまた仏教で  
 は、人間のことをマ  
 ヌーシャともいいま  
 す。マナーシャとは、  
 考えるものというこ  
 とですが、それはた  
 んに知恵をもつとい  
 うことではなく、  
 内に向かつて考える、  
 自己について反省、  
 惭愧することを意味  
 します。その点、一  
 般には「人間」と訳  
 されますが、また有  
 情に対していえば  
 「有覚」(うかく)  
 と訳してもよかるう  
 と思えます。  
 『大般涅槃經』に、  
 「惭愧あるものを人



ひかり幼稚園創立60周年「つららの坊や」朗読劇 左から山根基世先生 年長児達 青木新門先生

間では、**「有情」**、動物とし  
 ての私が、教え学ぶ  
 ことを通して、「有  
 覚」、まことの人間  
 に成っていくことを  
 めざすものです。私  
 たちは誰しも縁あっ  
 て、地獄の底からこ  
 の人間の世に生ま  
 れたものです。だか  
 らみんな心の底には  
 地獄の生命を宿して  
 いるのです。そこで  
 人間らしく生きるた  
 めには、自分の歩む  
 べきまことの道を、  
 しっかりと学ばねば  
 ならないのです。現  
 実のありのままなる  
 私が、理想のあるべ  
 き私に向かつて成っ

ていくこと、そういう人間成熟の道  
 を教えるものが仏教です。夫とい  
 妻といい、父といい母というも、ど  
 れだけ確かに、いい夫に成り、いい  
 妻と成っているのか。どれほど立派  
 な父となり、立派な母となっている  
 のか。その成っていない私が、少し  
 でもよく成っていくことをめざすも  
 のが仏教です。  
 教えを学ぶとは、あたかも鏡を見  
 るようなものです。鏡を見ながら自  
 分の姿を正すように、教えを学ぶと  
 自分の欠点、未熟さが知られてきま  
 す。そこで私たちは教えを学びつつ、  
 自分を反省し、惭愧しながら生きて  
 いくことが大切です。仏教が「有情」  
 から「有覚」へと教える意味がここ  
 にあるわけです。  
 親鸞さまは、念仏を申して生きる  
 ならば、誰でも「仏になるべき身に  
 成る」と教えられています。やがて  
 は仏になる身に、今ここで成れると  
 いうわけです。私たちは、それぞれ  
 が教えを学びつつ、少しでも上りよ  
 い夫と成り、妻と成り、また上りよ  
 い父と成り、母と成っていきたいも  
 のです。

## 安楽寺法要案内

一月	涅槃会 日時 2月19日(土) 朝・昼 講師 住職自動 テーマ 「さとりとは何でしょうか」
二月	彼岸会 日時 3月13日(日) 朝・昼 講師 呉 法眼寺 黒田眞真師 テーマ 「浄土真宗がめざすもの」
四月	花まつり 日時 4月9日(土) 朝・昼 講師 廿日市 最禪寺 米田順昭師 テーマ 「迷信のメカニズム」
五月	降誕会 日時 5月15日(日) 朝・昼 講師 豊島 登照寺 服部法樹師 テーマ 「どうして信をえらぶのか」

## 親鸞聖人750回大遠忌法要 4ヶ寺合同お待ち受け法要

1月16日、親鸞聖人750回大遠忌法要を安楽寺にてお勤めいたしました。法眼寺、堅徳寺、明法寺支坊と安楽寺の4ヶ寺合同の法要を、3日間かけて各寺をまわり、それぞれで、この度新しく制定された、宗祖讃仰作法という音楽法要でお勤めしました。各寺とも満堂の参拝者で近頃にはない大盛況を皆で慶んだことです。

今年が宗祖750回大遠忌法要の年です。50年ぶりの大法要ですので、色々イベントもあります。是非ご縁にお会い下さい。



## 安楽寺マンガ通信 (第12回)

信楽めぐみ作



ついに登場!  
 安楽寺マンガ通信  
 第一二回通信!



先日、安楽寺へ参詣した親鸞聖人750回大遠忌法要の様子をマンガでお知らせします。50年ぶりの大法要です。宗祖の法要にも参加してみたいですね。



あの800回法要は、まさか50年後の66歳に私でさる66歳に成っています。66歳の私にどうなるのでしょうか。



今回法要に参られた人の多くは、800回法要の時が難しかったんじゃないかと、私自身も50年法要の時が思い出す。寒い日が続きます。お身体に気をつけてください。

聞見

言葉について

信楽晃仁

昨年の十二月十二日、ひかり幼稚園六〇周年の記念に、映画「おくりびと」の原作となった、「納棺夫日記」の著者、青木新門氏と、元NHKアナウンサー室長・ことばの杜代表の山根基世氏にお越しいただき、お話しをいただきました。四〇分ほどのトークでしたが、とても大切なお話しをいただきましたので今回と次回に二回に分けてダイジェスト版をお届けいたします。

一回目は「言葉について」。二回目は「死について」のお話しです。

ことばの杜の願い、山根・日本の文化には言葉という言葉があり、言葉によって幸せになるという、言葉の力を信じる所があります。そういった言葉にむきあう日本人の心を大切にしようと言うことで、ことばの杜を立ち上げました。ひかり幼稚園も言葉の教育に力を入れておられますが、私たちも特に子どもの達言葉育てたいと願っています。

今子ども達が非常に不可解な事件を起こしますが、その背景には自分の気持ちや言葉を表現できないとか、言葉によっていい人間関係を築いていけないという、言葉の力の欠落と言言うことが指摘されています。その言葉について私たちはアナウンサーとして、またNHK職員としてずっと話し言葉に関わって仕事をしてきましたので、そうした話し言葉のノウハウをもっています。そういうことを少しでも還元して、子ども達の言葉を育てていこうという思いで現在活動しています。

私は色々な会議や審議会に出ますが、みんな言葉は大切だといわれまが、しかし作家さん達が多いせいか、大体その言葉は読み書きなんです。話し言葉について発言される方はあんまりおられませんか。しかし私の立場から言えば、日本の話し言葉なんです。学校教育の現場では、発表やスピーチの時間がありますが、じゃその隣の子どもとどうやって心を通わせるか、毎日の暮らしの中でどのような言葉を交わすことによつて、周囲の人と、いい人間関係が築

け、自分が幸せに生きていけるのか、そういう非常に身近な所での話し言葉が大変育ちにくくなっています。都会の家庭は核家族だし、地域もほとんど崩壊しています。子どもが先生と親以外の大人と口をきく機会はずとんどないのです。子どもの言葉はほっておくとほとんど育ちません。そこで私たちがしゃしゃり出て、周囲の人たちとどういった言葉を交わすことによつていい人間関係を築き、自分の気持ちをきちんと言葉に表して、自分の意志によつて、自分らしいと納得できる幸せな人生を切り開いていく、力としての言葉を身につけてもらいたい、そう思って活動しています。

伝える言葉

青木・私は山根さんと出会い、ことばの杜の願いに共感しました。現代は活字を目で追うという社会になっていますが、言葉で話すと言うことがとても大切なんです。

浄土真宗では聴聞ということを通して上人が非常に大切にされましたが、言葉や臭い、様々なものが全部ある中で育つものがあります。私はそれ

を納棺の仕事で、現場の中で感じるものができました。亡くなっていく人のすばらしさの中に、最後に「ありがとう」ということを残していく人がいます。悲しみの中にも和気が漂う感じがしました。ありがたうということばが活字に書いてあっても何にも伝わりません。言葉によって伝わるものがあるんです。

山根・声というのは一つに耳や頭から入るのではないと思います。肌から入って心にしみるっていう感じをもっています。特に幼い子どもに読み聞かせをすると、声というのは音波ですから、空気を揺らしているんです。だからただ耳の聴覚だけからではなく、触覚、肌の感覚を刺激して皮膚から入ってくると言うことです。これがとても大切なんです。今科学的にそのことがだんだん解明されてきています。子どもは身体で、メロディーやリズムを通して言葉を覚えていきます。そしてそれは幼稚園までが一番大切です。言語形成期は八歳か十二歳までといいますが、それまでにどんな日本語を聞いているか。どんな言葉を聞いているかが

大切なんです。言語形成期までに周囲の大人が、どのような言葉を聞かせるか、どんな声の言葉を聞かせるか、それが生涯の言葉になってしまふとすると大人には重要な責任があると思います。

私もやっぱり根っからの浄土真宗なんです。朗読の時に「肉声」というのは耳や頭から入るんじゃないんです。皆さんの肌から、毛穴に音をしみこませようと思って読んでいます」と、ずっと言ってきたんですが、浄土真宗も昔から「聴聞は毛穴から入ってくる」といっていたなんて全く知りませんでした。知らず知らずのうちに同じことを言っていたんですね。でも人間の本質的な感覚にそ

うしたものがあんなにしようね。青木・高村光太郎が「触覚の世界」というすばらしいエッセイを書いてあります。触覚というのは一番幼稚な感覚であると思うけれども、しかしそれは一番根源的な感覚であるという事です。触覚というのは大地とか肉声とか現場にいないと味わえない世界なんです。現代は頭だけで社会を作ろうとしています。そんな

ものは滅びます。現場がくっついたものでないとだめなんです。

本場の言葉

山根・言葉も本場に説得力を持つ言葉とは、自分が体験したこと、自分自身が自分の頭で考えた言葉でなければ相手の心には届かないと思います。観念の言葉というのは素通りして心に届かないような気がしますが、子ども達にどのような言葉を使ってもらうかと言えば、日々色々な体験をしてもらって、そういう原体験があつて、言葉を楽しまなければいけないなと思います。たぶん幼稚園の教育でもそうなんですよ。

青木・法然上人の一枚起請文の中に「私の念仏は観念の念仏にあらず。観念の口先だけの念仏ではないということとつながります。肉声が大事であり、親鸞聖人もきちっとそのことを言っておられます。

山根・アンデルセンの童話、マッチ売りの少女も、実は自分の中に全部体験があるんですね。お父さんは靴屋さんで、お母さんはとても貧しかったようで、幼い頃物を乞いをさせられていたようです。その母の話しを聞

いて胸を締め付けられるような体験をしているんです。そういう体験が下敷きになって、ああいう物語を紡いでいるから、彼の作品はすごく力があるんです。今世界に一〇〇カ国語以上に訳されていますので、やはりああいう世界的に普遍性をもつ作品というのは、体験に裏打ちされた言葉によつて紡がれた物語だからじゃないかと思えます。

青木・最後に、みんなでシャボン玉という歌を歌うようですが、あのシャボン玉は野口雨情が自分の子どもを亡くした。一週間ほどで我が子が死んだときに作った歌ですね。子どもをシャボン玉に見立てて、屋根まで飛ばずにこわれて消えたと。そこにやはりあの歌には、あの歌の言葉の中に、重い重い、深い深い思いがあるわけですね。それが込められた言葉だからこそ、こうして歌い継がれるのです。以上(第一部)

一月一六日の七五〇回大遠忌法要にお越しくださいました、本多静芳先生から先日お手紙と共に、先生のお寺の新聞が同封されていました。その一番最初に「宗教とは、生涯をたく

して悔ゆることのない、ただ一句の言葉との出会いである」金子大栄師とありました。

言葉の大切さに今一度私たちは目を向けなくてはなりません。南无阿彌陀仏の念仏は深く重い仏さまの思いのこめられた、そして体験の詰まった一句の言葉です。その言葉に出会えている事を「遠く宿縁を慶ぶ一年でありたい」と思っています。

童話「つららの坊や」 青木新門著 (サイン入り)

「つららの坊や」は、青木新門著の童話です。長年、児童書作家として活躍し、多くの児童書を書き送った青木新門先生は、今年60歳を迎え、この童話「つららの坊や」を著すことになりました。この童話は、先生が幼少時代に経験した出来事をもとに書かれたとされています。先生は、この童話を通じて、子どもたちに「つららの坊や」の物語を語り、彼らに希望を届けてあげたいと考えています。1冊1000円(税込み)朗読劇希冀温かみ希望